第 40 回
渡辺淳先生を語る
上中きみ子、福本人司、門野幸己、下森弘之、
渡邉満、田歌昇

平成 31 年 3 月 10 日

渡辺淳先生を語る

早川　みなさま、こんにちは。時間になりましたので、ただいまより第40回名田庄多聞の会を開催いたします。本日はいつもの多聞の会と違いまして、いつもは1人の方から1時間ないし1時間半お話を聞いて質疑応答に入っていますが、今日は平成29年8月24日にお亡くなりになられました渡辺淳先生の思い出を語るということで、6名の方にお願いしております。その方々から順次お話を聞いて、その後皆様から質問なり感想をお聞きするというやり方で本日はやっていきたいと思います。来ていただいた方はそれぞれにご縁をいただいた方ばかりなので、いろいろ楽しい話や興味深い話や懐かしい話を聞けるのでないかと思っております。最初4人の方のお話を聞きまして休憩をとります。休憩時には後に準備してありますコーヒーやお菓子を召し上がってください。ただし無料ではありませんので箱に100円入れてお召し上がりください(笑)。お菓子は公民館に勤務をしておられます早川恵子さんが作られたのと渡辺先生のご子息である満さんからもいただきました。休憩後あと2名の方から話を聞いてそれでおしまいになると思っております全体で3時間位の予定でおります。

それでは一番最初に上中きみ子さんから。お願いします。

上中　こんにちは上中きみ子です。私は以前図書館に勤めていましてそのご縁で渡辺先生と知り合いました。30数年来のお付き合いだと思っております。渡辺先生とは楽しい思い出がいっぱいあるのです。その中で

初めて今川裕代さんというピアニストが若州一滴文庫で演奏なさるときのことをお話しします。その前日の事なのですが、裕代さんはトークがまだお得意でなくて、若州一滴文庫でピアノ弾かせてもらうのですが、しかし、ピアノにばかり集中しているとクラッシックなのでお客さんは疲れるだろうし、それで渡辺先生に少しお話してもらおうということになりました。それは裕代さんの願いでした。渡辺先生は「私がそんなピアニストのところに出て行ったらステージがぶち壊しになる」と言われ絶対引き受けられないと断られたのです。それで前日の夜遅く、裕代さんから、渡辺先生が話してくださらないと悩んで私に電話がかかってきました。私は夜遅かったのですが先生のところに電話をしました。しかし良い返事はもらえませんでした。

　次の日朝早く渡辺先生をつかまえて、ステージに上がらなくてもいいから客席でお話ししてくださいとお願いしてオッケーを取ったのです。私ちょっと心配だったのは、渡辺先生はお話がとっても面白いのでみんな引き込まれていくと裕代さんのピアノコンサートがいつの間にか渡辺淳オンステージになってしまうのでないかと思ったので、渡辺先生の座られた椅子の横に私が座りました。そして先生には話が長くなったら私がストップをかけますから絶対に止めてくださいねとお願いしました。裕代さんのコンサートが終わりいよいよ渡辺先生のお話になりました。どんどん面白いお話で客席は爆笑、先生の話は佳境に入ってきて、それでも5分過ぎたので立っておられた渡辺先生の上着の袖を思い切りぴーと引っ張ったのです。先生がちらっと私の方を見られたので手でペケ印を見せました。先生は「あーそうやった」と言ってちゃんと座られました。失礼なことをしたと思いますが、先生はちゃんと打ち合わせしていても、お話が始まると打ち合わせとは違うことを話されて、しかし、その内容がとても面白くてお客さんを楽しませてくださって、暖かい話がいっぱい残っております。私のつたない話はこれで終わりたいと思います。

早川　まだ10分ほどありますが、ありがとうございました(拍手)。10分もあるのに5分ほどで終りましたので(笑)、どなたでも何かありましたら。

上中　まだひとつあるので(笑)。私の心に残っている先生は本当にこういうお人柄だったのだなということをお話しします。先生は郵便配達をしておられてずっと家を回られるのだけれど、たった一人で住んでおられるおばあちゃんの家に郵便物がひとつも来なかったそうです。先生は配達して居られて、この家は手紙も葉書も1通も来ないのだなと思われ、先生はそのおばあちゃんに毎日手紙、絵手紙を届けられたそうです。届けられた絵手紙はこれぐらいの高さまであったそうです。そのおばあちゃんが亡くなられた時に、親戚の方が渡辺先生のところにお礼に来られたそうです。絵手紙はきれいな箱に入って大事に大事に取ってあって、先生が「上中さん見てみ」と言われ見せてもらいました。渡辺先生から毎日毎日届くその絵手紙をそのおばあさんが楽しみに、楽しみに箱の中に並べておられた様子が浮かんできました。その箱の中の手紙を見たとき、ああ淳先生ってこんな方なのだと思っていつまでもそのことが残っています。先生は情が厚くていろんな人に温かい目配りをなさって、そ

していつも言われていたことは、「根付いたところで咲いている、自然はいつもわしらに教えてくれることが多いのやわ」と。先生はその通りの生き方をなさったと思います。先生はどんな時でも自然体です。どんな方に会っても同じ姿勢でお話しされ、包み込んでくださるような暖かさがありました。私は図書館で仕事をしていましたが、図書館を通じて渡辺先生にお会いでき、私が生きる上で本当にありがたい存在だったなあと今でも思っています。

早川　ありがとうございました。これからどんどんいい話が出てくると思いますが、今の話を聞いただけでこの会を開いて良かったと感じました。何かご感想なり意見はありませんか。

中野　今の話を聞いて淳先生らしいと思いました。私はそれほど先生と深い付き合いはないのですが、図書館に淳先生の絵が飾ってあって、あれは僕の家から見える風景なのですが、先生に「これは夕日ですか朝日ですか」と聞いて、「朝日にしても夕日にしてもあんな色にはならないのですが」と言ったのです。先生は「あれはあの山に朝日が指したときの表現なのや」僕は「いや大騒すぎますわ」。「君は絵心と言うものをなんと思ってるんだ(笑)。絵と写真とを一緒にしたらあかんで」。そのときに、絵というものにちょっと触れたような気がしました。

下森　上中さんの話を聞いていて、先生のことをすごく思い出しました。淳先生がよく言っておられました。「わしゃ上中さんだけは逆らいきらん(笑)、上中さんに言われると断ることができん」と。

早川　それでは次に二番手の福本さん、お願いします。

福本　こんにちは、おおい町成和におります福本と申します。淳先生との最初の出会いは今から25年程前になります。子供が小さい頃に一滴文庫の絵画教室でお世話になっていました。その時は家内が子どもを連れて行ったのですが、絵画教室はもう人がいっぱいで無理なのでないかと聞いたのですが、とりあえず行ってみようということで行ったそうです。門の近くに、その時は先生だとは分からなかったのですが、とても大きな人がいて、入ったらどうかと言われ男の子二人連れて入れてもらいました。そうこう話をしているうちにその人が先生だということがわかりまして、なんとか絵画教室に通うことができました。それからずっと時間が経っていくわけですが、絵画教室は隔週ごとに開かれていまして、家内が連れていかれない時は私が連れて行っていました。その時先生から「お父さん、ぼーっとしていずに描いたらどうや」と言われ、それが先生との出会いのきっかけです。これが僕が絵を描くきっかけになりました。人生の出会いというのですか、先生と会ったことで本当に人生が変わりました。

それからずっと先生の……アトリエに通って、絵の勉強というよりも、今から思えば本当に人生の勉強をさせてもらったと…(しばらく絶句)思っています。

今日は、今後皆さまが先生の絵を鑑賞する機会が増えると思いますので、絵の鑑賞の参考になったら良いと思いまして、先生の絵画論ではないのですが、技法のほうを説明したいなと思います。

大きく分けて先生の絵は三タイプあります。先生は正月の描き初め

によく佐分利川などの風景を油で描いていましたが、それは生のキャンバスを現場に持って行ってナイフ一本で描かれているのです。キャンバス＋ペインティングナイフ。しかも、ペインティングナイフ一本。一本で描き上げています。サイズに関係なく二時間くらいで。というのは、小さなサイズで言うと三号とか四号、大きなサイズだと15号とか20号。時間は小さなキャンバスも大きなキャンバスも一緒なのですね。それくらい先生の絵を描くスピードは速いです。パレットは使わずにキャンバス上で、キャンバスをパレットの代わりにして描き上げています。ナイフしか使わないから筆を洗ったり拭いたりとか、そういう時間がないので一気に描き上げることができるのです。

画集で言いますと、これは大島を描かれた絵ですが、これなどは三、四十分で仕上げられていると思います。いろんな色を使われていますが、キャンパス上でナイフを使って混ぜ合わせています。これが先ほど話した佐分利川の風景ですが、これもナイフで仕上げてあります。この絵は20号ですので、ここにあるホワイトボードの三分の一くらいです。今までの話をAタイプとします。

Bタイプはキャンバスの表面加工です。地塗り材といいまして、石膏の粉を練ったようなものをキャンバスに塗っていくのです。キャンバスは麻ですからちょっと荒いので、その目を潰していくのです。潰すことによって油絵の具の塗りがなめらかになる。そういった絵が画集のこれです。草むらの、これもそうです。このような絵がキャンバスを地塗りしてできたものです。

ペインティングオイルは一種類のみです。多目のペインティングオイルで溶いた油絵具だけで描き上げていきます。描いたあとに、ここが先生のすごいところなのですが、例えば、「草むら」で説明すると、草むらをすべてペインティングナイフで表現されている。描いているのでなくて、ナイフで削って草むらを表現する。だから、これも時間が早いのですね。ツルツルにしたキャンバスの上にオイルを使って絵の具を薄く塗るわけです。そのあと、ナイフを使って草むらを表現していく。私も同じようにやってみたのですが、同じような表現ができないのです。あとから分かったのですが、先生のペインティングナイフは特殊で薄いのです。画材屋で買ったナイフと比べ薄いのです。グラインダーで削られたのか、それとも長い間使っていて自然と薄くなったのか。だから、先生のナイフを使うと僕でもできたかも(笑)。

さらに。近くで見ないと分かりづらいのですが、例えばこの絵ですと、丸い点々が周りにあったり、細かい斑点のようなものが見えます。これは、こういった草むらの表現をしたあとに、それらが乾いて更にペインティングオイルを使って薄く塗った上に揮発性のオイルをかけるのですね。そうするとこういう表現ができます。実際に絵が完成するには何日もかかるのですが、先生が携わっている時間というのは分単位なのです。例えば、揮発油を塗るにしてもペインティングオイルを使った絵の具を塗るにしても本当に短時間です。何秒という、さっさとやってたばこを吸って、たばこが消えたら揮発性のオイルをぱっぱと手際よく落とすことによってこういう表現が出てきます。ここまでの説明をBとします。

もう一つCタイプについて説明します。これはキャンバス上で地塗り材を使ってデッサンする。どういうことかと言いますと、真っ白なキャンバスに先ほど言いました石灰を使ったどろっとした地塗り材をキャンバスに塗って、その地塗り材が乾く前にデッサンするのです。デッサンをして乾くまで1週間ほどかかる。そのあとペインティングオイルを使って薄く絵を描いていく。絵を描いたあと、これまで言ったような手法で描いていく。これをするメリットは何かというと、そういった一連の作業が終わったあと乾燥させます。乾けばデッサンした部分はエッジが立っていますので、エッジを削っていく作業があります。そうすると、微妙に線が出てきます。

左の白っぽい絵でいいますと花瓶の白い部分です。右の黄っぽい絵でいいますと、植物の茎とか。そういう所は紙ペーパーでこすることによってこういう表現で出てきます。バックは暗いのでみんな暗い絵だというんですが、実際は明るいんですよ、すごく。絵の具のチューブからしぼり出した絵の具が一番きれいなのです。混色は絶対されませんでした、先生は。チューブから出した色が一番きれいだから、それを使ってキャンバス上に重ねていく。そういう作業を何回もされています。完成するまで時間はかかるのですが、先生がキャンバスに携わっている時間は短時間なのです。それだからあれだけの何枚もの絵ができたのかと思います。

いろんな絵を置いていろんな作業をして、乾かす間に何枚も同じ絵を描いていましたね。特に大作を描くときには、エスキースというのですが、小さな絵を何枚も描かれていました。小さな絵を実際油絵の具で描いてみて、これならいいのかなということで大きな絵を描かれていました。

先生の絵画の技法について話をさせてもらったのですが、その他に思い出がありますのは、よくスケッチに行きました。油絵のスケッチもありましたし、普通のスケッチブックに描くということもありました。先生はバイクが好きだったのですね。知り合った当時は家にバイクが3台ありました。先生と一緒にツーリングに行ったこともあります。ツーリング先で絵を描いたり、山の中でコーヒーを沸かして飲んだりとか、そういうのが楽しかったですね。

それから先生と交友のあった作家さん達との交流を持つことができまして、その中の一人、多分皆様もご存知かと思いますが、村上肥出夫さんという方がいらっしゃいます。この人は岐阜出身の画家なんですが、天才画家と言われて、先生が20歳くらいの時に知り合ったのだそうです。絵の雑誌で村上さんのことを知って彼の画集を集めたりして、絵の参考にしておられたようです。それがたまたま、今から20年くらい前ですかね、当然淳先生と一緒に展覧会に行きまして、村上先生とお会いすることができました。

東京に兜屋画廊というのがあるのですが、そこの主人がパトロンになって村上画伯にパリに勉強に行って来いと言ってパリにやらせ、パリで何ヶ月かいて絵を描かせて、その絵を売り、また何ヶ月かパリにやらせて絵を描かせて展覧会で売る、というようなことでした。この村上さんがどれくらいのすごい方かといいますと、大きな百貨店などで展覧会をする時はそれこそ有名な方がその画家を紹介するのですが、例えば淳先生の場合なら水上勉さんが紹介するように、この村上さんの場合はノーベ

ル文学賞をもらった川端康成さんが紹介文を書かれています。つい最近の話ですが、2年前に東京に行って、川端康成が所蔵している所蔵展を見てきました。その中に村上先生の絵が何点かあって感動しました。

　横井照子という女流作家がおられますが、この方は愛知県出身で現在はスイスに住んでおられます。ご主人はニューヨークで写真をやっておられた方です。横井さんの美術館は岐阜の中津川にあり、そこに淳先生と一緒に行った時にたまたまスイスから帰国されており、紹介されました。生の声を聞くことができました。淳先生と知り合ったことでいろんな作家さんと出会うことができ幸せだったなと思っています。

　大事な人を忘れていました。秋野不矩先生です。日本画界では重鎮の先生です。この方のアトリエが京都の美山にありまして、そこにも連れて行ってもらいました。すごい方にお会いできたのはやはり淳先生のおかげかなと思っています。もっと喋りたいことがあるのですが、この辺りで終わりにします。(拍手)

早川　ありがとうございました。私、山が好きで福本さんとも一緒に行くことがあるのですが、淳先生のお弟子さんだけあって山でもさっさと絵を描かれるのです。絵が描ける人はうらやましい、と思っていつも見ています。何か質問やお話はありませんか。

早川　淳先生の絵にはどこかに蛾が飛んでいますが、あれはどうしてなのですか。何か聞かれたことはありますか。

福本　この話は皆様も聞かれているとは思うのですが、炭焼きをされているときに山の中で自分ひとりで過ごすわけですね。その時火に虫とか蛾が集まってくるのですが、そんな時「蛾が友達だ」と言っておられました。

上中　私も最初に蛾が気になったので先生に訊いたら、ひとりで炭を焼いていると、それがとてもかわいいとおっしゃっていました。先生のアトリエに行った時面白い光景を見たのです。猫を2匹ぐらい飼ってこられました。先生が丁度３００号の油絵を乾かしておられて、下のほうにまた大きなキャンバスが置いてあって、そこを猫が歩いたもので足跡がどんどんついたのです。「先生、猫の足跡がついてますよ」と言ったら「ええんや、そんなもの」放っておいたら良いと言われた。その後、今度は桜を描いておられた日だったのですが、「上中さん、この桜はどうして描いたかわかるか」「きれいにかけていますね」と言ったら、「これはねー、猫の肉球をあててみたんだ、桜に見えるやろ」と。楽しいアトリエでした。

福本　さっきの上中さんの話じゃないですけど、まだ子供がちっちゃい頃家内と一緒に先生のアトリエに行った時子供がやんちゃをして喧嘩を始めたんです。兄弟でです。ぬいぐるみの取り合いをしていて、そのぬいぐるみが先生の絵にべちゃっと付いてしまったのですね。もうドキッとして、どないしたらいいんか、先生に言ったら、いいんや、いいんやと言われて、絵の修正をされるのかと思ったら、ぬいぐるみの方を一生懸命拭いておられたことがありました。そんな光景を思いだしました。

早川　それでは次は門野さんです。どうして知り合ったかも含めてお話しください。

門野　先生との付き合いは結構長く、午前中に家で思い出したことをメ

モしていたら収拾がつかなくなり、まとまりのない話になるかと思いますが、言っておきたい話だけします。

これは、名田庄村の広報紙で先生を取材し1ページにまとめたものです(平成9年7月号)。写真はアトリエで撮りました。下書きで3ページ程書いてから削ったので、文字が詰まり過ぎです。

私が広報を担当したのは、平成9年の4月から平成13年の3月まででした。4年間、48か月になります。広報紙の「人」のコーナー(地域の人の紹介コーナー)に誰かいないかなと思っていたら、淳先生のお話が図書館であり、とても感銘を受けました。そして、広報紙に名田庄の風景を描いてもらいたいと思いました。

ダメもとで先生のご自宅までお願いに伺いました。その頃は茅葺の家に住まわれており、昔ながらの土間と上がりかまち、畳も年代物で大丈夫かなと思う家でした。部屋には描きかけの絵や画材などが所狭しと置いてありました。

母親の作った栃餅と鯖のへシコを土産に、広報紙に絵を描いてもらえないかお願いしました。「名田庄は行政区が違うのでワシが描いてもいいんかな、佐分利の人間が描いても喜ばれるんやろか?」と心配されており、「いえ、有名な画家が描かれた絵を載せるのは初めてなので、ぜひお願いします」と言い、二つ返事で了解してもらいました。

その後、母親宛てに栃餅とへシコの絵手紙が届き、喜んでもらえた様子で一安心したことを覚えています。先生からも栃餅とへシコが届くのが楽しみだったと聞き、広報の仕事から離れた後も事あるごとにお餅やへシコをお届けし、そのお返しに先生のもらい物の上等のお酒や絵を頂きました。先生は酒をあまり飲まれず、私の方が得をしている気分でした。物々交換は随分長い間続きましたが、そのうち先生もご高齢になり、へシコは塩分が多いのでどうかな?という躊躇いもあり亡くなる1年半ほど前が最後の訪問だったと思います。

私、先生を最初に知ったのは二十代半ばの頃でした、一滴文庫に「一滴」というB5サイズの冊子があり、その時編集をされていた武藤さんという方から「何か書いてもらえないか」という話を頂きました。その冊子は物書きや名前が知られている人が書いていると理解しており、素人が出しても良いのですかと聞くと、何でもいいから投稿してと言われ、病気をした時に京都で出会った看護師との交流を書きました。「これいいな」と言われ載せてもらえました。

その時の挿絵は淳先生が描かれたもので、私の名前は幸福の幸に己と書いて、さとしと読むのですが、先生はその名前を「ゆきみ」と読み女性と思い込んで、挿絵の原画を送っていただきまして、「今後とも頑張ってください」というような言葉が書いてあり、他の文面も読むとどうも女性と勘違いして出されたものだと思います。十年程が経過し、仕事で先生とも親しくなってから「あの時先生から頂いた手紙は僕だったんですよ」と言うと、「お前やったのか!間違えたなぁ」というようなことがありました。

広報紙に淳先生の絵を載せることは、うれしい反面、相当なプレッシャーもありました。私が広報を担当したのは38歳の時だったと思います。

その頃は20代半ばの職員がする仕事に位置付けられていました。

ある時、北欧を旅したことを『デンマーク徒然日記』という形でまとめた報告書を村長に見せたところ「これは面白い！」と言っていただき、すぐに広報を担当させていただきました。思い出すと、本当に4年間いい経験と出会いをさせていただいたと思っています。この仕事がなければ、淳先生と親しくさせて頂くこともなかったし、先生に描いてもらっているのだから、ちゃんとした広報紙を出さなければという思いも沸いては来なかったと思います。

先生のご自宅には、広報を作っている時、月に2，3回お邪魔し打合わせをしましたが、打合せはさっさと終えまして、「さてこれからどこへ行こうか、綾部の温泉が開業して、わしチケットを持っとるし」と私の分も出していただき、風呂から上がるとジュースもいただきました。私は運転するだけで、接待しているのか、されているのか分からない状態でした。男同士ではだかの付合いというか、大変親しくさせて頂きました。

広報の仕事から離れてからも折に触れそういうことを続けておりました。また、息子の特別支援学校の絵画教室の先生としても来てもらっていました。

先生とお話する中で、たとえば、絵について質問したときに実際の色が全く違う場合もあり、「これはどういうわけですか？」と聞くと、「絵というのは、絵空事という言葉があるように、緑だから緑に青だから青にせにゃならんとかいうことは全くない。自分が感じたままの色で描けばいい」と言われた。

それを聞いてはっとして、広報紙も行政の施策とかを住民の方に伝える役割があるのですが、伝える方法は自由でいいと。どんな表現方法であっても行政の施策を住民に分かりやすく伝える。そうでないと広報紙の意味がないと、気づかされました。それ以降、周りからは「変わった広報紙だな」と言われたのですが、先生には「よく出来ている」と言ってもらえ、コンクールの審査員からも「真面目に取り組んだ広報だ」と評価してもらえて、嬉しく思いました。分かってもらえる人には分かってもらえるのかなと…。

先生は、若い頃から炭焼きをされていて、自分の父親も炭焼きをしておったのです。父親は私が19歳の時に亡くなっていまして、炭がほかの燃料に取って代わられて炭焼きが斜陽化していくわけなんですが、先生の絵には炭窯の絵が多いですし、どういう気持ちで炭焼きをされていたのか。また、自分の父親がどういう気持ちでその仕事をやっていたのか、周りの人たちが炭焼きから土木作業員などに職を変えていく中でも、かなり長い間、炭焼きをしておりましたので、なぜそこまで炭焼きにこだわったのかなと、その時はよく分かりませんでした。

私が小学校の低学年だった頃だと思いますが、自分の父親か母親について何か書いて来るようにと、作文の宿題がありました。その当時、私、うちが貧乏だったのは分かっていたのです。しかし、その実感というか日常の生活はどこかと比べるわけでもなくて、それなりに生活していました。その作文を教室で読むことがありまして、「父親が山の仕事から帰ってくると、顔は真っ黒で手も真っ黒。どこも真っ黒で家の土間で服を脱い

で足を洗って手を洗う。真っ黒になったお湯を捨てて、そこに母親がまた新しいお湯を入れる。そのお湯でタオルを絞って顔を拭く。それでやっと家に上がる。」そのような内容なんです。子どもの目から見ると、そんな感じで、その時クラスの中で炭焼きの仕事をしていたのは、うちの親ぐらいで、学校でも2、3軒になっていました。同級生から「おまえの父親は、そんな汚い仕事をしているのか」と言われたのを、いまだに覚えております。

「なんで父親は炭焼きを続けていたのか不思議なんです」と淳先生に聞いたところ、「そうか、お前の父親も炭焼きをしてたんか。そうやな、つらい仕事やったし、子どもがそんなことを学校で言われたのは知らんかったやろなあ、この本を読んでみ」と言われ渡されたのが、『炭焼きの辰』という岐阜県の方が書かれた本でした。先生は「読んでみ」とだけ言われ私にくださいました。持ち帰り読んだら、内容までは言いませんが、子ども向けの本なのですが、炭焼きが斜陽化してくることもはっきり分かりますし、主人公が炭焼きに取り組む気持ちも伝わって来ました。

本には作者から先生宛の手紙が2通挟まれておりました。もらったけれど、これは先生が大事にされている本のようで、作者との交流もあってすごく大切なものだと思いまして、「先生、これは受け取れません。先生が持っていなければいけませんよ」と、返しに行ったのですが、「お前が持っていた方がいいんや、わしよりもお前の方が長生きするし…。」と言われて、ユーモアで返されるとどうしようもなく「ありがとうございました」としか言えずにいただきました。エピソードと言えば、これが一番心に残っているエピソードです。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

早川　ありがとうございました。門野さんはご自身で言われなかったのですが、たしか、広報誌が日本一になったことがあったと思います。次は下森さん、お願いします。

下森　下森です。私、これまで話された方の中で淳先生との関係は一番短い方でないかと思います。私がこの若州一滴文庫に来たのは約7年前、もうすぐ8年になります。ちょうどこちらに来たときに淳先生がちょうど80歳の誕生日の時だったのです。来たのが7月だったのですが、来たときに石山の喫茶店「フロッカス」で誕生日パーティーをしていたときでした。そんな風だったので、淳先生と一緒におられたのは皆さまと違って6年ほどです。短い期間でした。短い期間だったのですが、すごくいろんなことを教えてもらいました。正直、一滴文庫に行くまでは水上勉という人のことは知らなかったですし、本を読んだこともなかった、こんな小説家がいるなんて、知らなかった。一滴文庫に行って、それじゃ水上勉をどうやって勉強しようかというときに、淳先生は近くにおられていろいろ活動されてこられた方だったので、いろいろ教えていただきました。私が知っている水上勉という作家は淳先生の目を通じて知っている人物像ということになるのですね。なので、淳先生がどう感じたかというのを一番よく聞くことができたのでないかと思っています。ただ、もちろん、作品を通じて水上勉を知ることはあったのですが、やっぱり自分の中の水上勉像というのは、渡辺淳あっての水上勉になってしまうのですね。

お客さんに一滴文庫の話をするのですが、もちろん、一滴文庫を残

してくれた水上勉という小説家ですが、それを建てるまでに至った経緯、立ったあとも忙しくて故郷に帰ってくることができない水上勉の代わりになってこの町に残してくれた、しかも水上勉が町に寄贈してくれたあともあれだけいろんな人のために活動して、一滴文庫は今34年経っていますが、―水上勉は今年（2019年）の3月に生誕百年を迎えます―、一滴文庫が34年間あり続けたのは、違いなく淳先生が地元にいていろんなご尽力をされてきたからです。しかも、水上勉が知らないところで渡辺先生は町のために子どもたちのためにといろんな活動をずっとしてこられました。

先生の活動というのは、絵を描くとか子どもに絵を教えるということだけでなく、普通の人が普通にこなすようなこともずっとやってこられたのですね。一滴文庫の写真のファイルを見るとよく淳先生が前掛けをして草刈り機を以てその辺の草を刈っているとか、そんな写真がいっぱいあります。最近は腰が痛くてあんまり絵も描けんし、ここに来てもあんまり手伝いにもならんわな、と言いながらも草刈りをしておられたりとか。しかも、それだけではなく、一滴文庫に来て六角堂のテラスでずっとスケッチをしているときなんかは、お客さんが来るとすぐに話をし出して、渡辺淳とは言わないのですね。ちょっと話をして「一滴文庫はどうでしたか」と訊いて、すると「ぼく感銘を受けました、すごい絵を描かれる方がいるのですね」。「そうですか、ありがとうございます」。端から聞いていると笑い話のようなことですが、最後に「すみません、あの絵を描いたのは実はぼくなのです、渡辺淳といます」と言って、その場で描いていたのを「よろしかったらどうぞ」と。それを聞いたお客さんはびっくりしてしまって「済みません、もう一度きちんと見てきます」と言って戻って行かれました。

あんな楽しい方はなかなか居られないのではないかと思うのですが、一見陽気に見える先生だったのですが、その楽しさの裏にある、幼少期からいろんな辛い体験をしたという、山椒庵日記などに書かれていますが、ぼく自身も話を聞きました。「確かにいろんな経験をした、そのかわりそれと同じくらい良い出会いが私にはあった、下森さん、あんたもこれまでいろんな出会いをされただろうし、これからもいろんな出会いをすると思うんだけれど、私から言えることは出会いだけは決しておろそかにしてはいかん、一つ一つの出会いは本当に大切なものだから、それだけはその時はどんなにしょうもないことだと思っても、それからしばらくしたら大切な出会いになるから出会いだけ決しておろそかにしてはいかんよ」とよく言われました。

淳先生がお亡くなりになるちょっと前ですが、先生の画集を作りたいと言ったのですが、「いやワシのようなもの、恥ずかしいから出さんでおいてくれ」。「先生いろんな方から新しい画集ができないものかと言われているのです」。「いやいやワシの画集なんか」、と言われるのですが、こちらがごり押しして先生にお願いしました。「だったらもしワシの画集を作ってくれるのだったら、二、三ちょっとお願いがある」と。お願いされたことのひとつがタイトルでした。「タイトルを“出逢い”にしてくれ」と言われました。これは水上勉の生誕百年事業ということで画集を作らせていただ

きますと言いました。

「私が今あるのは水上勉先生とお会いできたからだ、それでそれから、いろんな人たちと出会うことができた。出会いの一つ一つは大切だったから、できればタイトルは“出逢い”にしてもらえないか」。「分かりました、それではタイトルは“出逢い”にさせてもらいます。内容についてはいろいろ考えていることがあるんです」と言ったら、先生は「それはできれば、私の意見でなく皆の意見で、私が関わってきたいろんな人の意見で、やってもらいたい。だから、原稿をいただくのであればこういった方々からお願いしたい」といわれたので、いろんな方にお声をかけさせていただきました。田歌さんからも原稿をもらっています。田歌さんは「ワシは淳さんが一番だから」と言われていましたが、そうじゃなくて、「あれは若いときから同級生というか、一緒にやってきたからお願いしたい」と言われていました。若狭湾美術展を一緒にやってきた千葉先生に、あの人も一緒にやってきて思い出があるからな、題字を書いてもらいたいな。水上先生の娘さんの蕗子さんにもお願いしたいし。それだったら窪島さんからも一筆、頼めるのであれば。写真は水谷内に任せておけば、あいつは全部知っとるから任せておけば良い、と言われたのです。

　そういったところにも淳先生の人柄が出ていると思いました。やはり、画集一つ作るときにでも、自分が作った自分の画集ではなくて、みんなでつくった、ということを考えておられたのでないか。もちろん画集だけでなくいろんなものも作ってくれましたし、いまだに一滴文庫に来る遠方からのお客さんで、山椒庵日記は売ってないのかと言われるので、いや、絶版で取り扱っておりませんと言うと、なんとか手に入る方法はないのか、と。本当にたくさんの問い合わせといただくのです。こちらは「毎日毎日アマゾンの中古本を見てくれ」としかお答えようがないのです。

　絵だけでなく文章一つ一つもこころに響く文章を書かれています。普通、文章を書こうと思うと格好付けるのですね、一般の人が分からないような言葉で書きたがるのです、俺偉いだろうと。海外では一般の人に分かる言葉で書くのがいい論文と言われているのですが、日本では頭の良いところを見せるために格好付ける。淳先生の文章にはそんなことは全くないですね。だから、誰が読んでも良いなと思うし、構えたところがないので、こんな読みやすい文章はないのではないかと思うくらい素晴らしいです。

　先ほどの広報の話のなかで名田庄のスケッチの話がありましたが、先生の地元に向けられた目、視点のひとつひとつ、これは水上勉では書けないものですね。地元にずっと居続けてくれて、80年を越える年月、名田庄や佐分利や本郷や大島をひとつひとつ見てくれた淳先生だからこそ描けた集落のスケッチであり、視点はそこに住む人々一人一人に向けられている、ものすごくあつい感じになっていると思います。これで終わります(拍手)

早川　ありがとうございました。大分長くなりましたので、ここで一度休憩します。

後半の部

早川　それではこれから後半の部を始めたいと思います。後半はご子息の渡辺満さんと田歌昇さんから話を聞く予定をしています。その前に、今日出席したかったのにどうしても都合が付かず行かれない、と伝言のあった渡辺孝男さんが淳先生のことを歌った詩をよせてくださいましたので、それを中野英二さんの朗読で聞きたいと思います。

(中野英二さんの朗々とした声が会場を満たしていく、「淳さん」は「じゅんさん」である)

淳さんに逢いたい

淳さんが旅に出やんしてから
秋が去り、冬が来て、春が訪れた
今、どこにおらんすんやろ
ランプの灯の下で炭窯の蛾やテンたちとお話か
みぞそばの花の咲く、野原に寝そべって青空を見とらんすんやろか
みぞそばは
かんざしの花
おふくろが
髪に挿して
野良から
上がってきた
コンペイトウのような可愛い花
愛猫のコラ、ギンチャンといっしょにネズミのお話をしとらんすんやろか
蛍袋の花の中でホタルといっしょにお母さんの話をしとらんすんやろか
川上の清水橋のたもとに、白い淳さんのバイクが待っていた
淳さんに逢いたい・・・・・
逢いたい淳さんに・・・

孝男

(拍手、続く)

早川　ありがとうございました。今日は一番遠いところ、福井から、来ていただいた方がいらっしゃいまして、用事があるということで中座されますので、お話をお聞きしたいと思います。

三武　三武でございます。平成16年、福井県読書会連絡協議会に淳先生に来ていただきたくて、その当時私、会長をしていましたので、一滴文庫にお願いにあがりました。それ以来、淳先生は福井の「サライ」で何度か個展をしていらっしゃいまして、そこでもお目にかかっていました。それから、その前にも、おおい町の、どこだったのか、私は出席できなかったのですが、200人以上の参加があった読書会連絡協議会で淳先生に講

演していただきました。福井県立図書館での時には213人。そのときは私がお願いして来ていただいたときだったので、忘れがたい思い出です。そのときは水上先生の「棗」という作品でした。淳先生のお葬式には駆けつけることができませんでしたので、今日はどうしても、今日が最後のご縁かと思いまして、先生とのお別れだけはしたいなと思いまして、今日寄せていただきました。

　皆さまの話を聞いていると、いわゆる血族の愛情、家族的な愛情を感じます。私は嶺北の福井市から参りました。先生は親しけれども私どもにはよそ行きの顔をみせていらっしゃったな、そこまではおっしゃらなかったなと。すごく恐縮して向き合われたので、今日のここは血族の集まりのような気がしました。何か申し上げると「三武さん、そこまで気を遣わなくても良いんだ」とおっしゃっていましたし。

　読書会では皆さまとどこかでお会いしたような気もします。今日は時間がございませんので失礼いたします。またどこかでお目にかかれる機会があることを念じています。本日はありがとうございました。(拍手)

早川　ありがとうございました。

早川　それでは後半の部の最初に、ご子息の満さんからお話を聞きます。

渡辺　本日は多聞の会にお招きいただきましてありがとうございます。実はですね、もう20年以上前だったと思うのですが、親父が名田庄に伺った後家に帰ってきまして、「名田庄はええ、名田庄はええ」と言うんです(笑)。もうしつっこく言うんですわ。他所のところをいいといって、自分のところをようする気はないのかなと。

　親父が亡くなったのは一昨年の8月24日でした。その前から痴呆症が進んでいたのです。人が来るとビデオを見せたがるのですね。自分の出演したビデオとか妹の結婚式のものとか、それらを他人に見せて長いこと付き合わせるわけです。それで、親父に会うたびに、ビデオを他人に強要することほど野暮なことはないんだと、しつっこく言っていたのですが、それは全然治りませんでした。私は親父と長いこと別々に住んでいたのです。県道拡張で家の方が立ち退きになりまして、それで今のアトリエの横に家を建てたのです。なくなる二ヶ月前頃から、「ビデオが映らなくなった」と言うのですが、それは映らないのでなくて電源が入っていなかったのです。それが何回も続きました。私はそれで怒ったりなどはしなかったのですが。8月になりまして、全然言って来ないなとおもっていたのです、私はたまたまうまく行っていたのだろうと思っていました。そうではなくて、家内の方には「迷惑をかけるからもう言わないんのだ」と、言うようなことを言っていたらしいです。それを思うと、本当にかわいそうなことをしたなと思います。　思う存分見せてやればよかったし、見てやればよかったなと、今になって思っています。

　先ほども話していたのですが、孝男さん(渡辺孝男)が来られた時に、亡くなる二ヶ月ほど前ですが、私びっくりしたのですが、孝男さんに向かって「あんた、誰や」と言っているのです。そのあと思い出したみたいなんですが、それくらいボケが進んでいました。

　私、実は一番親父のことを知らないのではないかと思います。いろいろ付

き合いがあった皆様の方がよほどおやじを理解しているし、いろんなエピソードもご存知だし。私は本当に知らないことばかりだなあと、今回寄せてもらって改めて親父を見つめ直すというか、思い直すことができてよかったと思っています。

私自身、絵はそれは好きだったのですね。小学校・中学校では5段階評価で絵のほうだけは5でした。体育は2だったのですが。小学校だったかな、一回だけそれが反対だった時があるのです、体育が5で絵が2。そしたら、次の時二つ丸を付けて矢印で反対になっていました(笑)。中学校の時、一学期間、絵を全く提出しなかったことがあったのですが、それでも5でした。そのあと先生が変わって、その時全然提出しなかったら2でした。私はこの先生なら信用できると思いました。だから、いまだに、その女の先生と年賀状だけですが、付き合いが残っています。

あといろんなことがあるのですが、思い出してもなかなかこれというのがないんですね。親父との思い出を考えると、昔、高浜などにサザエをとりに行きました。親父がバイクに乗せてくれて 連れて行ってくれたのです、親父の背中に捕まって。高浜の城山公園の洞門、あの穴の開いたところまで泳いで、ずっと回って帰って来たこともあります。私、船に乗っていたのですが、親父は「山ばっかり連れて行ったので海に行ってしまった」と言っていました。そこまでのことは、自分では思っていなかったと思いますが。海のことならある程度は分かりますが、家のこととなるとさっぱりで家内の方がよっぽど知っています。

先ほどどなたか絵手紙の話をされていましたが、絵手紙は８００枚以上あります。それくらい残っています。親父が配っていたという、その婆さんのことは分からないです。舞鶴の渡辺和子さんと言う方、相当昔、20年は経っていないと思いますが、その人にはずっと絵手紙を書いていたみたいで、遺族の方が返してこられました。絵手紙の場合、森岡みのりさん、ご存知に方がいらっしゃると思いますが、小学生の頃から文通している方ですが、葬儀の時に来てれました。だけど、その時、私、本当に忙しくて顔も見ていないのです。一言とあいさつしなければと思っていたのですが、とてもそんなことできなくて。時間がありませんでした。いつの間にか終わってしまって。「ワシが死んだら返してやるんだ」と親父は言っていましたが、返すのはワシやで！(笑)。そんなことがいっぱいあるんです(笑)。

自分の大切なものということで、自分の絵を貸している，そのリストが出て来たのです。だけど、「自分が始末しておいてくれよ、なぜ俺がしなくちゃならんのだ」と思いますよ。あまりにもいろんなものを残してくれて、残さなくてもいいものまで残してくれたので(笑)、四苦八苦している状態です。

おおい町に６９０点、これは親父が生きているときにこれだけ寄付しますと連絡しておったのですね。そのリストも一滴文庫を通じて手配していたので、それは、もう、全然問題ないのですが、アトリエにはそれ以上あるのでないかと思います。今後、私の目の黒いうちは、人に差し上げることはあっても売ることは絶対しないです。ちょっと終活しておいて欲しかったと思いますね(笑) 残っていたうちで絵が一番困りましたね。いろ

んなことがひとつひとつ片付いている感じですね。倉庫でも建ててそこに移そうかとも思っているのですが、なんせ量が莫大な量ですから、そして先にも話しましたがDVDやテープなども沢山あります。死んだばあさんが良く言っていましたが、「外でいらだく豆がら」「外では良い格好するけれど帰って来るととんでもない」、そういう類いでしたね。私も多分同じでないかと思いますが(笑)。まあ、それでも、今日、これだけの皆さまに来てもらって、慕ってもらって、本当に親父は幸せものだったと思います。

あんなかたちで死ぬとは思ってもいなかったので。当日のことを言いますとね、8月24日ですので墓参りの用意をしていたのです。そろそろ行こうかと思っていたら、8時過ぎになってからばあさんが「お父さん、風呂の中で死んでおんなる」と。私もびっくりしましてね、行ってみたら風呂の中に浸かっていたのです。その顔を見たとき、苦しんだ様子は、全く、全然、なかったです。ああ、これは心臓麻痺だなと思いました。苦しまずに逝けたのだなと思いました。朝風呂に入って、多分一滴文庫に行くつもりだったのだと思いますよ。

これで私の話は終わりとします。何か質問でもあればお答えします。

早川 ありがとうございました(拍手)。何かお訊きしたいことありますか。

福本千 ただいま淳先生が痴呆であったようだとお訊きしましたが、私の中では先生は最後までしっかりしておられました。

渡辺 多分、女性だからそういう風に見えるのですよ。

福本千 先生と知り合ったのは30代だったので先生から見れば本当に若輩だったと思いますが、そんなときから先生のアトリエに通わせていただいて、先ほど下森さんも言われたように、人生は人との出会いだということを教えていただきまして、行く度にお話しされることが私にとっては講演会を聞いているような内容で、一人一人のことを良く話されるのです。特にビールを飲んだときなどはここまで話して良いものかというような内容まで聞かせていただいたことなのですが、先生は良いお話、楽しいお話を、一人一人名前を言いながら話してくださいました。それで、会わなくとも、お名前を聞くとあの人はこういう人なのだと分かりました。満さんが奥様と出会われたことも事細かくお聞きしています。ここでは言いませんけれど(笑)。私たちはおおい町に来て先生とお会いできました。我が家の表札は先生に書いていただきました。アトリエでのお話もそうですし、アトリエには先ほどたくさんのものがあるというお話でしたが、どこに何があるか覚えておられて、私が癒やしを求めて先生のところに行くと癒やしのヒントになるようなものを与えてくださいました。

お孫さんの話をされていましたし、ご家族を大事にされて、なおかつ周りの人を大切にされていた方だなと思っています。知り合った方は淳先生には感謝しかないという気持ちでおられますので、今ある家のものを、大変でしょうけれど、お手伝いさせていただきますので、大事に大事にしていただけるとありがたいです。

渡辺 ありがとうございます。パレットというか、あの机ですね、あれを、

死にました次の年に大島に持って行く予定だったのですが、ＪＡＬの国際便のパンフレットに載っているというのを聞いて、うん〜、これは捨てるわけにはいかんなと(笑)。なんとかしたいのですが。倉庫を建ててしっかり管理するより仕方ないですね。

早川　それでは最後に田歌昇さんからお話を聞きます。田歌さん、お願いします。

田歌　私、一滴文庫の役員をしていたので、あのとき、一滴文庫の事務局長から渡辺先生が亡くなったと電話がかかってきた。本当にびっくりした、絶句しました。実は私、11月ごろ、こけて背中を打って、いまだに治っていませんが、寝ていたのを下森さんとじゅんさんが見舞いに来てくれたのです。そのとき、身体を温めていた方が良いかと思って風呂に入っていたのですが、うちのおかあさんが飛んできて、「大変なことや、はよう着物を着て」と。みんな来てくれていて、私、腰も痛いなり、六畳の間に寝ていたので、上がってもらえるとこもなく帰ってもらいました。申し訳ないなと思いました。その後、じゅんさんの調子が悪くなったと聞いたもので見舞いに行かなければいかんと思っておったら、行けないうちにあのような悲報を本当に受けて悲しかったです。

亡くなられたあと、一滴通信に、「悲しい、さみしい」という題で追悼文を書きました。しゃべり出したら切りがないので、また時間もありませんので短くお話しします。

いまから三十五、六年前、一滴通信にも書きましたが、私、永谷医院に入院していました。隣の部屋におかあさんが入院しておられて、話されている声が聞こえるのですが、大きな声で話されるのだなと思っていました。顔は見知っていたので話をしましたら、近しくなりまして、夕方帰ろうとしたら、じゅんさんが「うち来らんせや」と言われ、初めて「山椒庵」に寄せてもらいましたこんなことを言うと悪いんですが、今にも砕けそうな家で、絵が立てかけてあって、どないするんやろうと。その時から何回も家に行って迷惑かけたやろうなと思います。文章もそうですが、絵でも描いている最中に誰かが訪ねていくと中断されますやろう、それを私だけでないんで、みんな悪いんで。

新しい家が建ったときに、あの郵便鞄に「一日酔いにて・・・」と張ってありました。もうそれからは、一滴で会うことにしました。

糖尿の気があって、糖尿であかんのだと聞いていたのですが、一滴文庫でイベントがあるといつも受付をしていて、大勢の女の人が「先生、先生・・」とお菓子をいっぱい持ってくるのです。先生に渡したあかんで、と言うのですが、糖尿の人はおしっこで糖が出るので食べたくて食べたくてしょうがないんで。あとで二回ほどバイクでこけてバイクに乗られなくなって。

草花を取ってきて絵を描いておられたのですが、「田歌さん、ワシは名誉も地位もなにもいらん。絵さえ描いておればそれが幸せや」。それ以上のことは何も言われませんでしたが、属しておられた会で何かあったみたいです。無鑑査にしてやるから特別会員にしてやると、そのためにはとんでもない金が要求されたようです。それで、名誉も地位もいらんと縁を切られたようです。

亡くなられたときに家に弔問に行かせてもらったのですが、そのとき満さんと妹さんが枕元におられてお話を聞きました。ノートか日記帳かに、何も描けない描けないと書きなぐってあったそうです。

この「山椒庵日記」の文章ですが、面白い文章で、下森さんが言いましたけれど、画集に自分も書かねばならないことがあったのです。じゅんさんが「ものが書けない、字が読めない、新聞の文字が読めない、ちょっと難しいと読めない、あかん」と私に。電子辞書を持っていたので、「ここを押したら文字が出てくるから」と差し上げたら持って帰られた。画集でなかったのかなと思います。人間というのは体力が衰え気力が衰えてくるとものが書けなくなる。絵を描くことが最高の幸せだと言っておられたのが、それが描けないと思ったときは、ずいぶん残念に思われたのでないか。弔問に行ったとき、悲しかったやろうなと思って、じゅんさん長い間ご苦労やったねと思って帰ってきたのです。

じゅんさん、じゅんさんと言ってきましたが、後で画集がでたときに水上先生がじゅんさんと言ったのだと、画集に書いておられた。当時、すなおと読めるのかと思って読めなかった。じゅんは便利な良い名前だねと言った。作家でも三国出身の高見順、戦争中ですが野沢純、それから水谷準など、「じゅん」のペンネームで書いておられる作家は大勢おられるので、「じゅんさん、ええ名前やで」と言いました。その後、淳（すなお）だと分かってから「田歌さん、田歌さん」とおっしゃるので、「渡邉さん、渡邉さん」と言って話をしていましたが、つい何かあると「じゅんさんは･･･」と言ってしまうのですけれど。

あの一滴文庫の茅葺き屋根の家ですが、あれは納田終の小松谷にあったものです。小松谷に大きなダムができるということで、立ち退きになった。「じゅんさん、なぜあの家のことを知ったの」と訊くと、「わしはあの奥に大飯町の町有林があってそこに植林に行っていたから」。今の石山峠がない頃で小浜を回って行っていた。杉を植えに行っていたらその家が解体するという話が出たので、一滴文庫を建てるときに水上先生にどうやろと訊いて、それは良いとなり、谷組さんに頼んで移転できることになった。じゅんさんは「わしも何回も通って屋根の茅を外した」ということでした。

しかし、あの茅葺きがだんだん崩れてきて見る度に悲しくて「じゅんさん、何とかせにゃあかんで」と言っていたのですが、水上先生の娘さんの水上蕗子さんに「あんたしか言う人がいないからあの茅葺きの家を何とかしてほしいと言うて」と何回も頼みましたが、しかし、難しいなと。幸い今度話ができまして、おおい町の所有になりまして、いま屋根葺きから中の改造までやってもらっていて、せっかくじゅんさんが運んできた家がまたきれいになって嬉しい。

私、じゅんさんと年が一緒なのです。水上勉さんが半年で一回り大きくて十二大きい。じゅんさんと私、二人とも同じなので話が合うのです。ふっとしゃべっていて、戦争の話やあるいは炭焼きの話。あの頃は皆炭焼き、山の人間は炭焼きでした。私も炭焼きの手伝いをしていました。

じゅんさん、学校を卒業するとお父さん結核になって、薬をもらいに高浜に通ってそれから炭を焼くために山に入り、毎日帰るのも大変なの

で山に泊まって、その中で蛾などに魅せられてそんなものを描いて楽しんでおった。私にも絵を描けと言われたが、私はそんな才能がないもんで、実はうちの兄貴は絵が好きで、当時の美人画の挿絵画家、岩田専太郎のような挿絵画家になることを最高の夢としていたのだけれど、絵を見てまねをしていました。じゅんさんは「みんなまねをして描くのだ、そんなのはなにも恥ずかしいことでないで、だからあんたもせえ」と私に言われた。私は兄貴のような才能はないし絵は描きませんと言いました。描かずに終わりました。話すことに切りはないのですが時間が来ましたのでこれで終わります。とりとめない話でごめんなさい(拍手)。

早川　ありがとうございました。これでお願いした方からのお話は全部お聞きしました。あまり時間もないのですが、是非ともと思われる方がおられましたら、どうぞ。

下中　皆さまにお伝えせずに黙っているのはどうも具合が悪い、そう思いました。名田庄の村長をしていました下中です。簡単にお話しますもう九十ですのであまりちゃんとした話ができないようになりました、それともうひとつは、話し出すと明日の朝までやってしまうので(笑)。いままでずいぶん大勢の方に迷惑をかけてきました。今日はきちんと終わります。

　私が先生と初めてお会いしたのは就任してから一期目でした。私も何かの間違いで村長をしましたが、本当は絵を描くのは好き、ものを書くのが好き、小説は好き、映画が好き、そのような男でした。あの頃は上中先生が元の図書館で「渡邉先生と語る会」をされていました。そこに出たのですが、先生としてみればせっかく面白い話をしてるのに、村長がやって来たとなると雰囲気を壊してしまうなという警戒の感じがぱっと出ました。私はそんなのではなくて、役職を離れて裸でみなさまと接したいという態度だったのです。

　先生の絵を名田庄の広報に描いていただきました。それまでは暦会館の話が続いていたので何か別のものをと思っていたときに、門野君から先生の絵はどうかという話があり、もってこいだとお願いしました。ただ、後になってちょっとあのときはと思いましたのは、実はあの頃は広報紙の絵はモノクロでした。カラーでは印刷物ができないころでした。たまった絵の仕上げとして画集を出すことになり、ちゃんとカラーできれいな絵がずっと並んで出ました。その頃先生にお会いしたと思います。先生が「村長さん、挨拶はどのようなものを入れましょうか」と言われ、いや好き勝手に仕上げてくださいと言いました。その何年か後、敦賀のアーバンポートで何かの会合があって行った時に、アーバンポートのマスターが「名田庄村の村長さんですか」と。その方が実は渡邉先生と知り合いで、先生が言われるには、「名田庄の村長はごつい男だ、身体は小さいが。画集は全部ぼくに任せてくれた」ということでした。ああ良かったなと思いました。私の思い出の一つです。

　先生とは何回かお会いして話もしているのですが、そこにはやっぱり“村長”という肩書きが邪魔をして、私としては丸裸でお付き合いしたいのだけれど、できませんでした。それがたまたま何かで、東舞鶴の駅通りの画廊を借りて展覧会をされると聞いて家内と二人で行きました。

家内は」先生の絵手紙の教室に行っていたのです。そこでお会いして、そこでは全然感じが違うのです。あのときはいつもとは違う話ができたので良かったなと、裸で付き合いしたかったのがかないました。私は本来、本にも書きましたけれど、「広報名田庄」にもきちんとした姿で写真を写して挨拶を入れるということは、十五年間のうち、せずに終わったのです。門野君が挨拶の話を持ってきたとき、それならと、丸首シャツで首にタオルを巻いて写真を撮ってもらって「村長辞めたらラーメン屋をやりたい」。これが受けまして(笑)。そういう男ですので、渡邉先生とはもっともっともっと深い話をしたいなと思いながら来ました。今日、初めてここで身内の方とか親しい方とかとお話ができて非常に嬉しかったです。とてもありがたい話を聞かせてもらいありがとうございました(拍手)。

早川　ありがとうございました(拍手)。もう残り時間も少なくなりましたが。

中野　ちょっとだけです。いま、村長さんとか門野さんが来られて広報の話をされました。数年前ですが、淳さんがここにおられて手招きされたのですわ。それで僕、行ったんですわ。そしたら「君に頼みがある」と言われた。何やろうなと訊いたら、広報の裏表紙に載せた景色で一つだけ残したいところがある。「どこですか」と訊いたら、「納田終の勘定橋を渡った左側にポプラの木がある」「分かります、あそこはきれいですね、絵を描いていただいてありがとうございます」と言ったら、「あそこ、杉の木が生えてきて見えなくなっている」。「そうですね」と言ったら、「あの杉の木を切ってくれ」と言われた。「僕に言われても」(笑)。「いや、あんたやら頼んだんや」。「いや、僕の土地でもないし」と言って、「いや、先生の言われることは分かります。僕もきれいだと思っていたし。分かりました」

それで地主さんを探したのですが、まだ切るのは実現していません。あれはやはり切った方が良いと思っているので、もしお力のある人はどうか、お願いします。そんなことです。

早川　ありがとうございました。

粟谷　先生の画集「名田庄の風景」の中の文章で非常に良いのがあり、その中から二つほど、曲にしましたので最後に聞いてください。

(ギターの弾き語り)

小倉

♭片内方を家へ渡る橋から小倉を見てみると
この村の小、中学校が
白く大きく偉容として目に飛び込んでくる
保育園も手前にあるはず
この村の未来の英知が育まれる殿堂である
この谷の偉きな山やきれいな川で遊んだ子供たち
きっと自然児がいっぱい、いっぱいいるに違いない
そんなことを思いながら描いていた

虫野

♭家は三軒あるが、住んでいる家は二軒
上手に竹紙を漉いている酒井さん
下手に木工の伊吹さん
お二人共知友なので
前を通るとき見かけたら、声をかけている
それぞれに、ものを創る人達だ
この風土が合っているらしい
日当たりのいい小さな村である

（拍手）

早川　ありがとうございました。本日は3時間に及ぶ多聞の会でした。40回目の記念の会らしい長さでした(笑)。それではこれで閉会といたします。(拍手)

参加者（18名）

栗谷行男、大下新一、門野幸己、上中きみ子、三武光子、下中昭治
下西武子、菅原サチ子、大上あゆみ、田歌昇、中野英二、早川博信
早川真理子、福本千枝子、福本人司、村上正純、渡辺満